九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

貳臣の生涯 : 明末清初への入口として : 馮其庸・葉君遠著『呉梅村年譜』

中里見, 敬
東北大学大学院

https://hdl.handle.net/2324/6456

出版情報：東方. 123, pp.26-28, 1991-06-05. 東方書店
バージョン：
権利関係：

貳臣の生涯——明末清初への入口として

中里見 敬

明末清初は、波乱に富んだ王朝交代の歴史とともに、個性あふれる文人や山人の輩出した時代としても我々の関心を引き付ける。そうした時代の相貌に近づくためには、ある特定の個人がたどった人生の軌跡を追うことが有効かもしれない。

試みに『中国歴代年譜総録』（書目文献出版社、一九八〇・十一）をひもといてみると、多くの人物の年譜が編まれていることがわかる。そもそも中国には墓誌銘や行状などの文章ジャンルがあり、年譜はそれら伝記資料を基にして、事跡と作品制作時期、さらに家系や交遊を明らかにすることが要求される。

馮其庸・葉君遠著
吳梅村年譜
江蘇古籍出版社［予価二四〇〇円］

さて吳偉業については、康熙十二年の顧湄「吳梅村先生行状」、康熙四十五年の陳廷敬「吳梅村先生墓表」が伝記を記している。年譜には道光年間に顧師軾の「吳梅村年譜」があり、また新たに発見

刊行された『梅村家蔵稿』を取り入れて、一九二八年には鈴木虎雄の「呉梅村年譜」が編まれている（馬導源「呉梅村年譜」は鈴木譜を襲ったもの）。

新刊の馮其庸・葉君遠著『呉梅村年譜』（江蘇古籍出版社、一九九〇・五）は、上の二譜の誤りを正すとともに、内容を大幅に豊富にしたもので、呉偉業の研究者はもとより、明末清初に関心を寄せる多くの人の参考に値するものと言えるだろう。年譜五四七頁、付録を加えて全六一八頁に及ぶ本書は、呉偉業の全作品と関連資料の綿密な検討の結果であり、譜注および著者の按語において根拠が一つ一つ示されている。従来の比較的簡略な年譜との違いは、まさにこの譜注と按語の詳しさにある。その結果、呉偉業の事跡と諸作品の創作時期が確定され、当時の背景を知ることによって、より具体的な作品考察が可能になることは言うまでもない。また呉偉業は生前から声望の高かった高級文人であり、その交遊はきわめて広い。宰相周延儒、復社の創始者張溥、幾社の陳子龍・夏允彝から、説書の柳敬亭、名妓卞玉京まで、年譜に示された交遊関係を手繰ると、ほぼこの時代の著名人物を網羅したかの感さえある。こうした利用を可能にするのが、巻末に付録された「本譜人名索引」であり、本書の使用価値を一層高めている。

ところで、現在中国留学中の評者は、本書の著者葉君遠氏に直接教えを請い、年譜作成の意図を三点にわたって聞くことができた。馮其庸氏が序に書かれたことと重複する点もあるが、例をまじえて紹介する。

まず第一に、呉偉業の足跡にはこれまで不明な点が数多くあり、それを明らかにする必要があったとして、崇禎末期の三年間について、崇禎十四年七月までに南京国子監司業を辞したのを最後に、同年左中允、同十五年左諭徳兼侍講、同十六年左庶子に任命されながら、いずれも赴任しなかった事実を例として挙げられた。崇禎・弘光・順治と政権王朝が変わる中で、士人の節操が問題にされる以上、その足跡を正確に把握する必要のあることは当然である。氏はすでに、「呉偉業生平考辨」（銭仲聯主編『明清詩文研究資料集第二輯』上海古籍出版社、一九八六・十）において、弘光朝之行迹考・仕清考など四点についての考証を発表しており参考になる。

第二に、作品制作時期が確定されたことにより、作品解釈に有利な条件が整ったという。例えば、「圓圓曲」で呉三桂を鋭く風刺したのに対して、『綏寇紀略』では批判が弱まっているのは、呉偉業自身の仕清を境にして後の順治十五年に同書が完成したことによる変化として説明がつく。以上の二点を具体的な作品解釈に応用した論文として、葉民の「呉梅村鴛湖曲辨析」（『蘇州大学学報』一九八八年第三期）があり、作品成立時期の論証に基づいた緻密な考察となっている。

第三には、新中国成立以後顧みられることの少なかった呉偉業に正当な文学史的位置づけを図りたいとの意図があったという。貳臣という点が嫌われて、解放

後文革終結までの間に発表された呉偉業関係の論文は十指に満たなかったという。段玉裁の娘を母とする龔自珍が幼時に母から呉詩を聞き覚えたことや（龔自珍「三別好詩、有序」）、馮其庸氏が序文で回想していることなどから、清代から民国までは人々に親しまれていたことが窺われるにもかかわらずにである。

このように、本書は呉詩を読もうとする者にとって必携であると同時に、呉梅村研究の到達点を示すものでもある。ただ葉氏は本書の脱稿（一九八五年）後に発表した「呉梅村鴛湖曲辨析」において、「鴛湖曲」の成立を順治六年から九年へ改めている。利用者側にも本書に豊富に引用された材料を再吟味する余地はあるだろう。

本書の出版とほぼ期を同じくして、宣統三年董氏誦芬室刻『梅村家蔵稿』を底本とし、戯曲三種を加えた『呉梅村全集』（上海古籍出版社、一九九〇・十二）が、李学穎集評標校によって刊行された。これには顧師軾による年譜が付録されている。また『呉梅村年譜』と同様に佚作が輯収されており、相互に補いながら利用する必要がある。

（東北大学大学院）